宇治拾遺物語 四五

祕

内閣文庫
和書 類
三二三三七號
一一冊
二一〇函
二一〇架

太政官文庫
號 函 架 一一 冊

413

内閣文庫
番號	和	32337	
冊數	11	(4)	
函號	210		122

共十一

国立公文書館
National Archives of Japan

宇治拾遺物語巻第四目録

一 狐人に付てしとぎ食事
二 佐渡国に有金事
三 薬師寺別当事
四 妹背嶋事
五 石橋下蛇乃事
六 東北院菩提講聖乃事
七 三河入道遁世之間事
八 進命婦清水まうで之事

九 業遠朝臣蘇生事
十 篤昌忠恒等事
十一 後朱雀院丈六佛奉作給事
十二 式部大輔實重賀茂御正躰拜見事
十三 智海法印癩人法談事
十四 白河院御寝時物にをそはれさせ給事
十五 永超僧都魚食事
十六 了延房に實因自湖水中法文之事
十七 慈恵僧正戒壇築たる事

秘閣圖書之章

むかし物のけわづらひし所にて物のけわたしのほどに物つきの
女に物つきていふやうおのれはたゝりの物のけにても
侍らずうかれてまかりとをりつる狐なりつかや
に子どもなど侍るが物ほしがりつれはかやうの
所にはくひ物ちらぼふ物ぞかしとてまうでつるなり
しとぎばしくはせてまかりなんといへば
しとぎをせさせて一をしきとらせたればすこしくひて
あなうまやあなうまやといふこの女のしとぎほしかりければ
そら物つきてかくいふとにくみあへり紙給はりてこれ
つゝみてまかりてたうめや子どもなどにくはせんといふに
紙を二枚ひきちがへてつゝみたれば大き

国立公文書館 National Archives of Japan

かけたる城せめしかは淀川のへよりみ出されしかはむねとよきものあまた
うちしにしてとられけるへまかせけん人と談合の人々も
とりくといふそのそちにあらそひて年をへ過ぬるそのいへいへを
あはせありて合戦あひありあるに当たる上からける
相さらはかりし世に希なる事て鉄炮希なる事
能州の国にて鐵といふもの出ぬれといふ羅南蛮と
つたへ来る寺のさかひの六十人にてあるべきよしなれと
いふ寺は侍よしろしくみもと六十人の長寿ありけるをもて佐
渡の島まで出られたりしかはうかれ家へありしかとも人
まいれそうる城寺にてされ柳とも城あるしかれとも
きく相さそをあはれしてこれを

まで此よし金乃侍る所はし所をとひとめきて佐
ひらといふ人はさらにつきてさりとてきこゆんやとかへし
侍るそれはまうでとこえんとてさらにあまりとてそれて
んといふむまへんとも行つちたらしめ小船にてとりれ抱
出ししと城路にてまかりいてむかしへをしやとかへりて
まうせんといへりおほくみな過つていかよりめてきて
をもとをもて小船にて合戦抱出ししと城をとせき
つまにれ時をも過勢にてもとの事へとてもとにそら二月て
りあるまゝらむとされためるかとしての勿ときと
きてやまの間をとめなあるせ廿日の合戦の寺かへて人
侍らくりなくやうそてかばかり出合なかり合戦の難かりし

くろばみたるさいでにつゝみたる物をとらせたりけれ
バ守おもげにひきさげて懐にひき入
て帰へ入にけり。其のちかのかねとりの男ハいづち
ともなくうせにけり。よろづにたづねけれどもゆくゑも
しらでやみにけり。いかにおもひてうせたりといふことを
しらず。金のある所をとひたづねやすると思ひ
けるにやとぞうたがひける。その金ハ八千両ばかりあ
りけるとぞかたりつたへたる。かゝれバ佐渡国にハ
金ありけるよしと能登国のものどもかたりける
とぞ

今ハむかし薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。

別当ハしけれどもことに寺の物もつかはでご
くらくに生れんことをなんねがひける。年老病して
しぬるきざみになりて念仏してきえいらん
とす。無下にかぎりとみゆる程によろしうなりて
弟子をよびていふやう。見るやうに念仏もた
ねんなく申てしぬれバ極楽(ごくらく)のむかへいますらん
とまたるゝに極らくのむかへハ見えずして火の車
をよす。こハなんぞ。かくハおもはず。なにの罪によ
りて地獄のむかへハきたるぞといひつれバ
車(くるま)につきたる鬼(おに)どものいふやう。此寺の物を一
とせ五斗かりていまだかへさねバその罪(つみ)によりて

此迎はえたるなりといひつれは我いひつるはさはかりの
罪にては地獄におつへき様なし其物を返し
てんといへは火車をよせて待なり。されはとく〳〵一石誦
経にせよといひけれは弟子とも手まとひをして云まゝに
誦経にしつ。其鐘の声のする折火車帰ぬ。さ
てとはかりありて火の車はかへりて極楽のむかへ今なん
おはするとて手をすりて悦つゝ終にけり。其坊は薬師
寺の大門の北のわきにある坊なり。今にその形うせすし
てあり。さはかりほとの物つかひたるにたに火車むかへに来
る。まして寺物を心のまゝにつかひたる諸寺の別当の
地獄のむかへこそ思ひやらるれ

土佐の國はたの郡にすむ下種ありけるがおのが國に
はあらで異國に田を作りけるが・おのがすむ國に
苗代をして植べきほどになりければ・其苗を舟に入
れて植ゑん人どもにくはすべき物よりはじめ
て鍋釜鋤鍬からすきなどいふものにいたるまで
家乃具を舟にとり積て十一二ばかりなるをのこ
をんなご二人乃子を舟乃まもりめにのせおきて
父母はうゑん人やとはんとて陸にあがりにけり・
舟をばあからさまにおもひてすこし引すゑてつながず
しておきたりけるに・此わらはべども舟底に
よりふしにけり・しほのみちければ舟はうきたりけるを

はなつ風にすこしふき出されたりける
ほどに干潮にひかれてはるかに
湊へ出にけり・沖にてはいとゞ風ふきまさりければ帆
をあげたるやうにてゆく・其時にぞ童部おきて見
るにかゝる方なる沖に出たれば泣まどへどもすべき
方もなし・いづかたともしらず只ふかれてゆき
けり・さるほどに父母は人どもやとひあつめて舟
にのらんとて来て見るに舟なし・しばしは風のかく
れなどにありやとたづねけれども・なかりければ
いかにせんとなげきけれどもかひなし
かくて此舟ははるかなる南の沖にありける島に吹つけてけり

なる嶋にかまし河をとく、まつし。はるをも河くおろそく
ゑ河かぜて見れば、いつもの色、人家しづかへきこゆるもおかしけれ
も嶋におりとて、いはれある所かはまく、出べきかくれなし
さうしきてもいはいちばかりの畑地にあらず、山乃ちくれなきや
あらんかぎりとすてまるし、河く色合して、いきとおもしろき
道河ぞなりけれ、いつもくいはちいあるへを相いたる苗
乃つゞぬき紀ようへんといふもぞ、あるが見てえて此の
あれ乃あつとある所乃田に繁りぬべきこととよ見
いづしらく栅鐵（すき）のあつとを道え、本地にて庵（いほり）をつく
つとあるなり。抽乃本にはおくりなるおかりをれは
る道海よりくれくあうしくて河かぜに秋にも似たり

きうしきさる番かかゝやあつとまん河くてりまする田乃おくそく
おほくに見ゆくてりまするるもちと此わけさうと与うと見れ也。
おかし、外にも地角をまそくさうとて、あるべきなるぬへめ加と
こう始めにあうと名乃ちくて女子あまたさうそ河くまそてまる
そまつる妻取をゑがよ取りくし河く大なる鵜ありまれは、
田まくるまもおかく此く此比八ちう妹背うえ河く来そう
まさる人とも見まりにあまなると見なりてそあんなる。
妹背（いもせ）嶋とて大佐乃南の河によあるとぞいへよりし
武ちくに乃まいるへし。女あつとまり雲林院（うんりんゐん）乃并談
よたのをあがりつ名さいりまる所にのる西流乃金んちく
ありて石橋ありける。此乃それとも井あまうり三十えう

つきの女房中にくへあゆをゐくりけれとし給ふかゆへ免し
そくさいぬ事にあくまゆ嬶そうへさまして成るえしさえてよ清く
らけるふぐら事その来りくしまさく嫁されけれ共在れ下
まくらけその事りあゆもとしい家をにの中をゆへしる
女乃ありよ事ちてゆくくともる乃くらけその中をえ
まりける女乃人よ成よあ屋しく茶女中の見えく物よ
らあらんゆをいつさされ何するに所あしとのへくあれ斬
春きんとよりや身まかせん屋くえんとて走りけり
くゆらそりとりよ此の女ともて一人ゆくりけれ共十まども
家のとよくらするのあるとも走らぬきまる文教
し屋のみゆり入へあまでもくらあの女よくてり

ゐと見え清きやうなん屋も面し斗ども家初をつき出清る女乃
間よれを見てもさまいゆ里へる里れさん屋くえんとせ
くむ女乃まり様とゐれせてあゆをゆくかとれ雲林院
まさいろと清きぬる乃いや事まりよれそりて此の女ゐ
ぬまいお乃蛇もの乃やりてくるもれもとゐまゆつもゆる
まとも堂様をつきをきくへ面し希ゐるれとさう
間ともれ事後する事ほどしよかりをそてねまい女あら
いほるよ出てさうれくくらけるをもつきてやぬ此の女で
まりまる事さん屋くえんとて居よ書ちて案を後よ
げぐぬ下を便りよ行と海りて家をそられいのよ里いへ
くらけるをもしくしてく入ぬいまでそこれか家あるりける

思ひつよくふらんは女しおなさけふかくりよの心にてつらくす
流れの身もあらんかぎりの世の中のあはれさを思ひみ
ちやと思ふよみゆるべき人をもけをまじへてみれは心よあ
ゆゑなるきくわが中よりもの事どもへまんゆきまするべき
西もんえぬきとおもふれども人さまでさぬ心をん為しく之
きものくちけなの情まする女ぞとあるあるべしといわすよ
よもつれなき人あまたといへども老なる女ぞそきて
恋しれの給てしいつもまでいふもの、あるべしするはる
とおもくふよれど、何とも申ありといふよく
傾城んのよくかくせといふとしもそのそてされ
いなせしきのあなれきりてふの女なるらかふそ

さしくじきの志をらみえしらのまと便どかまりてく
ふるめかはつけきてされは此女をとゞめをりあげて此くち
おやしはねぞてりきゝせうり女房よあやうとなくよの
かなしうねぞうりて父はさするもの恋りとみゐか恋わとく
日比ごろそはれよつまをくぐらりとけりねましいふら覚
のありさまよ思ひつきて宿へきぬをもおくれらの心ぬしとおもひ
ゆゑ女よいみをうかくやどさせ給へらめくりよ給をや
あるうりんくみてさうらん次たのしおへとえいうまて
くや給やらとて次ともしいはとぬ出であづきされは
そき遊ひのり人給くされて此女中ぬかれしゆやかちらんまて
らんとされとも、ちくいるし流の乃とやてもつきぞやと

思へども清水寺ハ我らか念かあしく谷あらんと思ふく
そのものいふべくも乞食さん寺へ参りて夜中乃ことく海
てまものみなれども終りよきゆるかくともはきて清ども月
大清水もそちの女をもねぬあまたく候ハゞあらんと思
ちくまだひおきてこれもちの女ハのきこえなどよねおき
てどもかくもあきりて来あるじとおぼゆる女よりこ
女ちまひ菩薩にて見つまとらへもいかりよりん清水へる
うくえへて此の給へる程にまよ人々のかめの多くも思ふくみ
まゐておしろをきんも人に立て志をかくちあるなる女
きしよどのうちくに寺へまゐるの通へ人をとうとめし
とゆかれしかるにまもかくちあるその所にていみ石橋

のちにかゝるのちハ我まゞしてはらはしとかりんの
去するかと江戸白ちとのまゞ枕も大在様市と志て給
しにまき参りまゐてくお乃く我まぬりまゐてくらましと
思ふれおしりぞしお乃人のかそし清りん所を見まゐらせぬ
てゆうりくつおもむもやさんと見てく清き見もよきさう
しかどよかうハ梅乃花のよきみのけまれてもうれ清
そもよさいつとまゝ母ますゝわてあれいてき清きをとう
を頼みてくゝらよすつとくおかくつ我さへかみが
してくれちの給て人々むまの勤め待べきく連れちら
かくあつと待ち参ていつく候を之て紀く
つもまするかりおの乃むくれりん抛くあらせそありてござ

かくおもへどあて躁子てやつるべき事なりとよそへひん
見給ふとかゝるよあさましく如く此乃座ぞかゝる
女乃いよ為く海むとやをとのとゞへぬ中よりぞのびゆる
りもも給しぞかくのほし給ふもの事りぞきのよ
笄衛よ急給しもとみえてさしにれありかゝれ給さと
うぞこもり見苦しもてあゆくきまゐりしにたよ見その
すど乃河のいつもずかは城あ見えなをせ見ちりし下より
まゝぞてあちもしこぐちあそのいづくきて流るもり
さいのちし城かくと流ぜやさんとどつどもを流まを
つきくハヾらぞ夫るもあしもとひとりてをやあと人ず
らんとかゝるやしきく急くゆきさげりし事ら謙海の名

いもえ乃くさそてまくて給ひしかども人も五してはまとざり
しありそてむお路しおりそりきましあり
かぞひりそきそん屋くゆゐしくてどもりきぬ出まれ
むてほそくよ残あし給流るるりぞの夜あるさぐる
までハよくちひそももうえもをにれ給り流くぶぬ
くく見給つまむくちあそもみし給ちきてしもそれ
よあえまてかくあ鳥く残し路へハあさましく
おもひもしくかくあむましやも心すまるもぢハそれ
まと流かてするく何むどもやさむあぞいれいうきれく
はかた流ねよ行りよれ流く去る人よある如よ告す
まてむ乃女よはこのゝくありてこの流ハあるよと夜

志かれば大衆乃下知用ひずして濫ぶるがまゝにあり
くゞりとも事かなはくぞあはれなげかしかりけれ
あらじかしとぞ
東北院乃菩提講はじめたる聖はもとはいみじき悪
人にて人屋に七度まで入たる七たびといひける
たび検非違使どもあつまりて是はいみじき
悪人なり一二度人屋に入んだに人としてはよか
るべき事かはましていくそばくの犯しをし
てかくて七度までは浅猿ゆゝしき事也此度
これが足きりてんとさだめて足きりに率て
行きて切らんとする程にいみじき相人ありけるが
る道ずがら捕へいきあへるを是乃あしきらんとするもの
みるよりてくいふやう此人をば我にゆるさせよ是は
かならず往生すべき相ある人也といひければよし
なき事をいふものもおぼえぬ相する法師かなといひて
たゞきりにきらんとするを其きらんとする
足乃うへにのぼりて此あしのかはりに我足
をきれ往生すべき相あるものあしきられて
はいかでかみんなどをめきさけびければきらんと
するものどもしあつかひて検非違使にかく乃
事申侍しければやんごとなき相人乃いふ事を
あるにてさすがにもちひられずとてかくて別当にかく乃

まけんあくまと申されはさらずしゆへよそてゆる
さまたげよなりぬれはたまの緒人ゆかりして法師になり
くいとしたるによなりて此菩薩たちはじめくるしまこ
とよ桐をかぶれくいづく修行とくにそうせ給はれ
くさまたかくやうきんずる人もちる桐ありともなかなる
なれ桐人はすべて事ありてもあへぶまはりもじめなる益
さる縁もきへまでかゆしぬるべしとまあくれなる
事なりし
冬河入る日まで修行してありけるおりをとれつまを
だざると法くつかくうちつきの女よも法きてされま一
書ありそて三河へゆくくさるとなるかぎしたる女人しく

まづくれくよありけるかくても折ふし風くらうせう
なる城のなりしさ乃わすると云ふかくもせぶくふまひさ
もかくされなりしくら城主へゆりきるふよあさまま
しきも乃口ふると申事りきなふそうとむ心づでき
て家くくもふつまとくきなへまじうなと世うき独生ぞ
あるとき事とかまれなりきる比之河乃かよ風姿とふ
事城しきなよいききなるとい今事に猿をいきなる
おなしなる城人てく出乃かのきなんとおすふ心付く
きるも雛子お誕生なるとらへてく出とれのそまうけるを
いざ出乃雛子ふいきひしは行くつまでらまんいまずう
あらまれ風よ参と心らん十ていれまれいそてぬ心

まいらんとせしける良某乃袖をとらへしめぬりいへくだかふ
んいつくうあちらこれまのさうあやうしあつんなりてとや
しいそれありもあしきのゝ心まりあするをしのてあさ海
志きおく我もいふうとしきりかうておうつていう有れ
しも我むしらせきまいてきてつゝしておもくともそ
ふ我をとうへいくにせしくむけつとよむしつとられしう乃目
よ子とも血乃けしる我ませれし目をとあさてさとそ地をくれ
うまいてよういんあんせきさる我をて悪く世人とはて立そく
みくものまゝしあり知らば世をがかく嗚ふく與まりもち
むちくいつくなさきかけよしふまのもありむまを
そそく知ろうと世ありまてしかにさきされて血乃けがくと

いづくともなき我のどのくかうしまれもおそろしくゆくへぐと
まけるに息をとゞめて死をまちてもまちしがおろしさそていう
今まさにかうしくゆきいきて人に咒人させまれど心と乃
わよ侍きりも死せる者とつて今そ者きもそのをそまさ
人のうちうめりけりしみれきる我ぞくしもなきて命ぞ
をとびかりて我々をとさそて物のまきさきるようましきと
うれまゝる心もれども去くもあらぬれどもあさりさて今そまの
白主府をとゞめて京よれおつくゝ法師よなりにさりた
仏乃御おもり有まてもよく仏我うてめんとそてがふ命の
乃事をと是をくりんむ事ゆる也乞食とつふふとしけるよ
ある都よ宮に袖あきしいもごぞそまそく居よ其へみそ

さきてものゝとくゝをきかれば。武ゑみよぬく
ふかんとしきるわじよ。我屋をとまきあきだすより出る
内よよきゝ志屋がだく。坊さる女乃力する城をたて威。
我きたもうしふりさ。まがりきてあふれいうくてあ
らんたとうんとが。おほれしかぐくはれえく見あゝせる中ち
布る誠がつしとしもくる。ふしとて。見てるきゝとき
ふくてあれやふぬけそくいれく抛よくうらくひて夜
つきるをきもり。あるしかく。託念なるうしたるをおかくれ
ちうて生れしさるふなつとれあれいさるまてるしとも
おりくたしおるとも帝る。ふり
いきまん。むかし進命婦ありける時。常に清水へ

ぞうりきかゝる師乃備きくよゝるときち八十九になり也。
法華経は八万四千余あまみな真文るをのちや。仏乃
女房ちとかんく欲心をかうて生ち滴ちよ病り
あらゝくもそく女犯なんとあるこふあれバ。背子どもあや
しと試みして同くいそくの病のあり夜うち
まゐ世界ゟ事はあらばおかりしめとらとのある
おかかきらぬ進ちはよりはきき事也とるこの時うちて
いそく識ざ京ゟ清水堂へさいとるを女犯なちろづき
あまゐて抛せとやさしやとあまれしゝより。武三ケ夜
殺念乃病よなりていまだしそでよ蚫なよ落なん
まる心うきまゝせといふおうて無事なる一人進命婦乃と

へ行く六乃事抔つくし終に女子なとやすくきこへ迷
ひ足痛なとしらぬとうらて年月をとゝめりおけるあはれ
ふぬむまどりうん銀針をさてゝゆる分ちて男乃心く
されとも公女おふ子きくさきゆくえくいふ分らそし
此世のこゝろてま沢る仏ぐしあさからぬ作ずなり
さゆへかもつてかかをられんまうむきなとん
此所く法ぐかまゝさせ行きさかし其終くれとりおかなさ
らまゝざかしこいふとまき武僧乃あふと去れく合殊
様ならくそりしも言そていふ分ぐうまつくまてう塔
行出より八万余字らんまり其る法華経乃宝薬
一乃文をそぞ此おふてなある僧をとうまた世行なく開白

檀殿なとうもの世路へ女きとうまま世行つく女法ぐ厨ぐ殿堂を
行へ僧抔ら両を路をく法縁乃大僧にもとうもの世路
へとい兆れふうくむ風ちら死ぬかはよい乃女凡中店
應まをかえ通まいて世るくたそうて京極大分で条家
三井乃兇晩班うも抔うん在ま返りとして
おまいとも今をむつし業遠船に死するときく此堂の
入る分へおかをらま通帝分そいれあうくべき事あん
めしふ彼乃事也とてある脱る銀溶僧正抔めし業
遠の家よむられ行てかねきるる死人くめら滴ち
よ様出て西あま抔いれくうらやまき目をと
閉くきりとり

一

しまさを今もむかし民部大輔葛昌といふ人の
ありしがある時法性寺殿御時蔵人所乃反閉よせし
ものまうしやいふものありけり件乃葛昌が役り
催しけるが気色りしやうの役をすべきものゝあら
ずとてまいらさりける程に司小舎人をもてあまた
く呼召催しけれどもまいらざりければさて武所
司に抽やさんとすれはまさにやあれてふみにまいらせ
ありて膳をとらせてかの役に催しふみもいひけ
るにぞ葛昌がもいかゞする事のとかさるぞと
らんときゝてまかれとてまかりしは抽といふぞで
ありけりと申てのちあくまゝに葛昌がありけるもと

うらをとらんとてあそびけるよし別乃ことゞいひ
ぞ民部大輔立臣乃それあるはせんとてこれなれ
といふことを申しけるにおかしといひて逃けり又家府
司をあつめけるに我をなしといふ随所司つかはしや
うまてゆるりとありける程にいかにしてあそぶ随身
ときゝてことゞとりしいひける程耳にきゝて
随所司所司のまゝ人によびつけりけるにあそびといふ
身の綺しくそことえつめけるは家の人々のうちあり
あしれ思ひたらぬにいまの武正府生これ
清るが其乃人くりはらきものゝおはせまにといふ
ひあくせ清るよさとしゑんに侍てねむさてはとし

こゝろ乃おくにかくしまいらせて持ちけるに申さるゝ法なり
としいれさせ給ふ事也されば法ねむごろといひけるを
みかどの所司代あり所司とぞ法まうり
奏しまいらせける
右の事を今はむかし後朱雀院とゝのへたまへぬ法せうを大
事にかへし給ひける時後生の事かなはれかし
めしおかれしに法華の法堂へ参りさうらひて其法
をうけて此六の佛をはじめ給ふ人の子孫にかならず受
に悪人にかはらせ給ふ事なかれ此六種つぎの者
まうり法華にかなふべく御ともにあれかしとめいすべしと
右の事によりてかくの冥途にかなへと合せて是

六佛をはじめらるゝ伴乃仏山の灌仏院にあり安置し
奉らせ給ふ
右の事を今はむかし式部大輔實重ハ冥途へまいる
おもひしかなきを知りて後生乃運をいのりまいらせて有
よもすがら利生のあはれをいのり人びと其夜に大明神
まうで實重をまいらせて後ぞ世がくしま
まてよりみ人来りて實重浄土をみてまいる
右のまことよりし利益にある夜下乃法社に法尽し奉る
殿上人へまいるあひだ来代のため利益に
あれをはじめ百官供奉法ねの御し實重かの藪
にかくしおかくされて円融院中に金泥乃経一巻

おそし流しけるを其わ影に一稱南無仏皆已成仏道
とかきしけり。ゆゑんそれをうちさめぬとぞ
あましもつまもむつし。智海(ちかい)清示有識(ゆうしよく)乃さき清水る
八百日さゆりまく夜字く下向しまゐる手もしけしよ。唯(ゆい)
円教(ゑんけう)意(い)逆即(ぎやくそく)是(ぜ)順自餘(じよ)三教(けう)逆順(ぎやくじゆん)定故(ぢやうこ)といふ文を
誦しける聲あり。其ときに車乃わりける人乃誦むる
なんとかゝれくちよりいでて。されど白癩(らい)人なり
ことさらにみぐるしく経文乃事抔云ならひ程こみまへ
さましけり。南都二京にありしかども乃学生あしぐ抔を
とかくいふ清まる所によりてくとおもはましいひけ坂には
なりといひけり。後に其あぢく蔵まれど其つねあいむ

しておそろしきまゐらせし化人にやありけん也
かなしみけるとぞ
あましも今もむかし白河院の御ときとかく後抵
其かうそれきせ絵にかゝる者の家にへ武具と清
まかりて上手なく屋までさゝあるまで義家(よしいへ)朝臣より
めされけれども由乃黒ぬりなる弓一張をいらせたり
きこし栈渉まくらにたてらるゝのちからをうせさせ給ふ
かくして御さとりまして御感ありて此ゆみハ十二
年乃合戦のときやもちたりしとかれける
たゞおぼくぶよし申させまゐらせけり。上皇之感りに濃
感させたまふとぞ

これも今はむかし南乃京の永超僧都は魚なき
かぎりは時非時もすべてくはざりける人なり。公
請済とめて在京乃あひだひさしくなりて魚をくはで
くづをれてくだるあひだなしま乃丈六堂の辺に
てひるわりごくふに弟子一人近辺乃在家にて魚
をこひてすゝめたりけり。件乃魚乃主のちにゆめに見
るやうおそろしげなるものどもそ乃辺の在家
をしるしけるに我家をしるしのぞきければたづ
ぬる所に使乃いふやう永超僧都に魚をたてまつる
ところなりさてしるしのぞくといふ。その年このむら
乃在家ことごとく疫をしてしぬるものおほかり

たゞし此魚乃主が家ばかりぞ一家その疫をまぬかれたりける。
よりて僧都のもとへまゐりてこのよし申ければ
僧都此よしをきゝてかづけもの一かさねたびてぞ
かへされける
これも今はむかしならず延房阿闍梨日吉乃
へまゐりくだりける唐崎乃ほとりにて有相安楽
行此依勧発といふ文を誦しけるに浪中より散
心誦法花不入禅三昧とつぎ乃句をぞ誦じける
ありがたき思をなしていかなる人ぞとゝひしま
せしかばこれは奥房僧都寛円と名のりき
まさに河によりて流文を誦しけるよしかやうに侍る事夫

あるひとこれを見て常ハ僻事ありといふなりそれはさる事
よくゆゑありておそれいりても生死をさりてねがふ人ハ力
およばぬことなり我まゝにしてはなれてもわかせとされ
きゝたまへ
これも今ハむかし慈恵僧都ハ近江の国浅井郡
人なり叡山の戒壇を人夫かなハざりけれハ
えつかざりける浅井郡司ハしたしき上に師
壇にて仏事を修せらるゝこの僧正を請じ奉て
つとめて僧膳のまうけにおまへにて大豆を炒りて酢を
かけゝるを何しに酢をかくるぞととはれけれ
バ郡司いはくあたゝかなる時すをかけつれバすむつかりとて

にがみてよくはさまるゝなりさらざれハすべりて
はさまれぬなりといふ僧正のいはくいかなりともなじかは
はさまぬやうあるべきなげやるともはさみくひてんとあり
けれバいかでさる事あるべきとあらかひけり僧
正かち申さバ異事ハあるべからず戒壇
を築てたべとありけれバやすき事とて煎大豆
投やるに一間ばかりのきゐ給ひて一度もおとさず
はさまれけり見るものあさまずといふことなし柚の
さねのたゞいましぼり出したるをまぜてなげやり
たるをぞはさみすべらかしけれど又やがてはさみとゞめ
給ひけり郡司一家ひろき者なれバ人数おこして戒壇を築きてけり

同一家にありきこゑのあまたゞし人数をかぞへて不日に
戒壇をば築きてけるとぞ

宇治拾遺物語巻第五目録

一 四宮河原地蔵の事
二 伏見修理大夫許へ殿上人共行むかふ事
三 以長物忌の事
四 範久阿闍梨西方を後にせぬ事
五 陪従家綱兄弟互に謀りたる事
六 陪従清仲の事
七 かな暦あつらへたる事

八 實子にあらざる子の事
九 御室戸僧正の事
并 一乗寺僧正の事
十 或僧人の許にて氷魚ぬすみくひたる事
十一 仲胤僧都地主権現説法の事
十二 大二条殿に小式部内侍うたよみかけたてまつる事
十三 山横川賀能地蔵の事

一 これも今はむかし山しなの道つらに四の宮かはらと
いふ所にて袖くらべといふあき人あつまる所あり その辺の下す
のありける地蔵菩薩を一躰つくりたてまつりけるを
開眼もせで櫃にうち入て奥の部屋なとおぼしき
所におさめおきて世のいとなみにまぎれてほどへ
にければわすれにけるほどに三四年ばかりすぎにけり
ある夜夢に大路をすぐるものゝこゑたかに人をよぶ
こゑのしければ何事ぞときけば地蔵こそと高く
此家のまへにていふなれば奥のかたより何事
ぞといらふる声すなり 明日天帝釈の地蔵会
し給ふにはまいらせ給はぬかといへば此小家のうち

よみまいらんとおもひて。まづ周乃あいねむりさめつるま
じくと云へるつまへゐてさしりまいらへと云ひめさしみゐね
そひでしつきつるんと云ふよしるとおひ。きちかくざあきて
かは乃ゆくも義身みし法にまして。かしこひさいをすまあ
なしくらく夜あきるゆく乃ろ紙おもてくえんせ。安地獄
おさ記えくかきおさてまつりおさりける紙をかし印物して見えい
ぞしくめりまいらあまはつ見えてかへりそへてと安らずあきれ机乃
そくいろき開眼しまなしてありとけん
これもいまはむかし伏見修理大夫乃もとへ殿上人
廿人計押しよせたりけるに俄にさはぎけりさかな
ものとりあへず沈地乃机に時のものどもいろく

そくさしける事に騒し。さかづきたびくになりて。おの乃
くたはふれ出けるに。厩(まや)よりくろき馬の額(ひたい)すこししろき疋廿
疋おなじけなるを引出して。移(うつし)乃くら廿具鞦(しりがい)かけてひかせ
出たりけり。殿上人酔(ゑひ)みだれて。おの乃この馬にのりて
ては乃くら置てのせくおくりけり。のちとめ
てまいりて。あしたいつもじくまうでけり。さればくい
ざま乃事なり。せんと云て。又廿人ばかりおしよせたりき
まゐりむかへに乃。まけたびくおもひまして。俄なる事に随て
きのふよりもよろしくもありけるとて。かしこまりまして厩
を見れば。黒栗毛なる馬をぞ。廿疋まで立てたりける。
つきける。これも額(ひたい)白かりけり。大かたかばかり乃人

ありけるに。伏見殿ハ宇治殿乃御子におはしけれど。さ
まことにきこえんたちおはしけるを。讃岐守橘俊遠と
といひける世乃中乃徳人ありけるが子乃やうにて
しなさせ給ひて人になさせたまはりけるとぞ。
おほせごとむかし大膳亮大夫橘以遠といふ人の五位
ありけるが。宇治左大臣殿よりも召ありて今の間
そのかみ捧物いとゞまゐらせける事ハと申されけれ
ば。おそらくに世にあるものゝ捧物とハいはんとやハ
あるまじうおぼさるまゝとよろこびしめけるを
まうし恐ありしかどもいそぎけるほど十貫文より
ありて左大臣殿にまゐらせし捧物ハでまうけたる

御ことに庭よりかへり給ひてなどして。仁和寺梅などをはじめ
修をする高陽院乃修理乃あひだより家事どもをつかさどりて
備なりそへまゐらせける。清捕見ありとて其乃ひさしをたてゝ
いつきたまひてさくらなんどとする事。今まゐる人二
人居てむかしおほゆることに作りてなくさせられけり
をきえだ御心までもよめさせてまゐらすとこれ
これハおほせられたまひて織事をして待ち給ひけれハ
及もなく申さるゝ盛人所に居てあそびまゐらせ
ありけるものゝはれなりけるに。左府きこし召されて
其乃ものいひたちけれども世に知られて盛兼中務
以長よ作とやまうしいふに手かけてき捕見すべき程

しらせまいらせさりけるかと露ほども信ぜられねば猶
あはせ乃首級ハ今の龍人所々を徘徊よりもちあかりける
まくハくと大かたにさく怪からぬ尸屍の亡ハぬるに
ちらくしるに地忌信じくいはしにもめされけれバさき地忌乃より
をとやいはし猶地志にいふ事やさてあるまじくのさいつる
へきよし信ハしめてまいり作る地蔵堂へ地忌とて
事もしらぬとさりとくも色とも申せ通へきり世にて
ちられつきさく地もあをくと迄て合を得きりさそ
尚遣をいまはむかし縁之阿弥陀来迎とて備あり
あつて山乃揚厳院にまゐり人まいり結縁入りて極楽をとね
乃行住坐臥西方极かしあけにまいりつぎきこ大小夜酉

ましりはせず入目銭をかりて身おくらず飛脚より座まへ
乃がる時をも所とろぞ引しくあゆむ港の日くわらく
くるもとあるも志ともかむらせとおぼくまゆにあつかふを
飛方にかきまんといひんて急ぎ銭をざん臨終
正念うたかひそ深くたのみいふ念を申し往生待るに
入とう

是も今はむかし。陪従はさもこそはといひながら。こ
れは世になきほどのさるがくなりけり。堀河院の
御ときの内侍所の御神楽の夜。おほせにて。こよひ
めづらしからん事仕れとおほせありければ。職事家
綱をめしてこのよしおほせけり。うけ給はりてなに
事をかせましとあんじて。弟行綱をかたすみへまね
きよせて。かゝる事こそおほせ下されたれ。わがあんじたる
事のあるは。いかゞあるべきといひければ。いかやうなる
事をせさせ給はんずるぞといふに。家綱がいふやう。
庭火白くたきたるに。袴をたかくひきあげて
ほそはぎを出して。よりくよりくさむらと

さしきとよりちらかづらちとあつさちらあぶらんと
それぞく嘉太夫と云ふぐりぞゞりそしつもめづらんとお
もひつくある人きとしいふは浄瑠璃がいやそくさも節らかん
従太夫名当代の流ありてかそえきこゆさ出すくまづり
あづらん節しさつてそん八御んあしや八べつりんといふれを
道も京浄瑠璃はさいそれけちざらそおしことはれせあ
かしこうやあそせてくきりとこれまる献しく人あと節とと
まりそれども古れいつあくるあしとも文ずらんと出ん
ともゆしてすいのよ人長浄瑠璃めすしせんせは浄瑠璃お
くさせる半けきやうりてへぬき八上よりもう
のあしくけき名らにありしめそれどもは人長又

すらえくく浄瑠璃のすとめすさき浄瑠璃を見ゆさむしだくなる
まへしきく候して勝をとそしくまでかきあおぞそいくそえき
ちと初してさうむきさむ当流る数つまでもりるく
よろひ古きそてさうめくさむきよ当うちてう西づ城あ
つきちらあづらんといふれく嘉太夫十まえるあ口
りまそらぎなるあ上下さ母みつてるますて大
かくとのえしりきるも浄瑠璃くもえりよりくれてき
座りよ世のしうちらまさぬるてそてゆきらひ
ろく自をすえあそせむしてまく浄瑠璃を浄瑠璃歌も
ひきろいむくうまでするまでかくされどもそのと名む
名ききあるきとれて浄瑠璃よりて名らそのことき

のこそあるざりし兄貴乃中君ばかりぞへつべき
いかあらんとこそいはれ帝王も御経よみたまひて御む
はれまうさむ後乃源氏のまつりの後三十五法師
承乃あるがよ御経読経よりて入道長めしぬ
てん湖竹臺乃をとすまりてうちめかんずる流あれ
そひけんずる抑そてそやいはへ君乃そきちくづ
ぞくとよびて會うれすれねそはくさんと云きれ
宮御読経とうもあらむそのきおぞやさんとおを
うきてし川おそ人長者ちむてみくい御ぞすまぶ
そまりて御経會をうち若ちて竹の臺乃すとそり
よりてさいあうきてあまちばおぞすろうやとしいそぐ

うまつまでちくつとつそんと。まいそんずして御読経
りきいたりんずる乃ちく會うそせそれきれども。後と共
んとおもふちく會うちとよ執よりそれ紫きいは小會き
あと名をくそ者とかすぎそてそうもへりよきりぎ乃あと
上まそてきこうめりてゆし哉高ちうりそく
あるとけるとりやさ執よ御経よそうらまいとさるあちり
そぞいひ申る
常まことも今もむかし三條乃大宮とやけるは白河
院乃文鳥羽院の御母大后よ御そし侍る。
二条北大宮とぞ申ける三条よりは北堀河より
は東はよ御そしましまどれ流所被よきとまいへ。

有賀(あるが)太郎て備後(びんご)乃あまをしりまゐらせける重保(しげやす)乃
切腹(せつぷく)し給ひぬときゝてあはれとおもひ侍りけり
ありけるまゝに隠居(いんきよ)清仲(きよなか)とて若つねよりさかひ
けるがふかくおもひて侍る事どもみな残れくるまを座より
乃つま事見かくしよりあるを拙者いろしあるとし
くしまら清乃種之薪(たきゞ)をきせ給へと座かりのさらにき
あり。かの事状なる滑浪にはらふへ申されし
清仲をとめて父もあらせかへして侍きぬはなきと座
又みくく古物新しきものかくなりけるをいひけらとも
ぞしもりするものみるへやせ。さへしもかくもまことにて
さぬよし。お状こまゝめするハ何事にかあらんとてさ

あらぬぞてしきりにとゞめさせ給ひとらまし存れど清仲申けり
別乃事にもあらず。薪(たきゞ)に添てまゐらせよと申ければ太郎とかくて
まゐらせど此事ともかくはからひまゐらする事にもあらず。さらば
追つぎをとりてもらさせ給ふて侍しまゐらするとぞや。此清仲
ハ清娌なる故清ときゝ表白乃まつり季房乃孫なるより。
故なる清乃ひとをのくさそりあはれとくやとかまへけり
まゐるにも清仲もとり清ともゐんなりしも乃にあはれとも
おとりきぬいけり。ねかまへく清ときゝ大よしあく京乃
ひとあれたてと何さ海ゆゑもちられ清とめよとおや
きらせけるがいかにとまゐりてまぬと申て座して社
頭よりまゐりける也きおきしかてかくてかれらしめすなる

しうるしめくさかけ給ひて。ほる銭年られゆうきあれし
かしまうでまうしらびくこのち座うにらて宮使と仕
らうやとやある銭伯流くそのもさうつれあふ袖と
をく恋つかよ入てもられ乃しろうさる銭伯まだ
と衛子うづねありきましま。しうくとやけるまへとしう
申せるとぞ伝ずありきさ家
しまさも今出でむかし。ある人のもとに志まは女房乃
あるとあるが人よ郷(みゝ)出ればくづうと家りしかるるうちき
備日かるゐ暦(こよみ)りまでゆへと見れあすまさ六備座しきまと
いれくりきてゆうきるとさじめ流りぬハう家まへくろミ
わとまえのよし。かん日く恋同年とめきてゆうけるり

御らくちゑ海よぬらく。或抄くりぬ日月とかき。文
ありまててあれしよくらみ白ふくゆきもうぶ女かや
かるこしえりるとにおもくとも。でとめぐをとりは思ひ
ようぞきみみにと身すてと思ふらくかれまいにゆえへ
むてきてある日もおぼえるとかき年れども。いうおと
もゆりへともさすてあるめとて宮志くもさて始み。
ひづく恋自乃屋うよまてゆへうれくとにげか
きゑゆまでし二日三日まてハかへどかるるかどにまつる
世とゆべきたうちあまきても右あ乃ゆるてまうちと
かくるいりよきんくとよちづうもどうつきするかどに。
を乃しかわつしざうしくあうあるとい

寺道は今もむかしも乃人への一ちやう子たきもしぬ人
ありきしよ乃人のそれのよし銭ありて中々かましくも
ありそ乃てくときこゆる人うせよける乃ちうれ人
乃もとにそうはちかきみ侍乃妻ありてして田舎へ
いてありそうみなめうせよまれなれども人き屋うもなく
けりく京へ乃ぼりつよすうずれはあるへきやうしもな
く世よりけりまる身に子をと云人まて一定乃
よしとくに親乃家よねうる事ってやるく云侍らうも
つきまり旅屋よ年はなみけし前よなかしや着てそ
さらうく人はまいらんさんよいつりさとるとはしといへ子
さるみまゐるてもかゆきそうしさあり人は獣面あるん

するうし云れ都とまりきれも侍しかりせめしやうれ
くねありけるるかじましちうより法なる侍はぞさそて法華
君へまり世治へと云れ寺道へ院くさうりよまうらいめし
法きしつる侍きぞしはも世治へと云ありてえいりぬる
まいりせも浦ていのさ浦古屋乃かうも浦人ようれよ
あるうくららむてりんさうじなとも小古まする中じに屋をみ
おいね中乃さらじ身あくべ道もいできとれあいさうこれ
あの中し名家人へあゆとおそそり寺道坂へる浦くよ
此そしじる乃侍さとりをよろことひく袖をたちりあぬ
我やお乃ありし事にとかくの外くらんとなへくつみぬ
くとともいとやかくりうしと云れきれれいへ古屋乃ありくし

ましくにはかなき世かくしきさぬがおくれなよおもわしく
しよさ道をてそしられも吉原のくはかなき様よおもはず
ゆかりもとおもの人もみれあしぬなとしたるあさましきこと
と思ふく此浪情よりて屋くともの道しててむともかなに
花のよき道世中も、いふ屋ともそてまくなどてはれ分まる
おさなくて母の身もなくそてありしつく吉原の者
屋はよくもかはしぬなり、その道もとも我し吉原とた
れたるくあるへのうしきれ何かまもやせまる恋とへいかる者の
こそてあらんずるぞすい薗湖さむ道なりおもの引ねをま
そて仰ありよかするきねつ川ねきて手もびく今え
ましかりし事道人さりつるべきなりとて人お乃情を可か世て

おそりぎたの人もの乃身もみくかくいうんかれあり〳〵や
吉原乃をしけのもかくかくい道ぎい恵めりしきそて此
かくおの年まもちぶなくてあり妻んふ記んの恋とあり
ともく情乃人よめしてくお道ハ吉原乃事ておもくし
謡ひしもの為りまがりく京よ出たれめちかまるれ
かりれたるしれたくきす会道ていふへもれ者なるおもてそ
むとつ人なく出ちねおの情のそれもらとせしとい事と
う佛よ中かく者するのきておもの乃ありぬれちとふ宮をき
よつよするへてびくおの情よおもとれよ他いわせ
ろくきうせんとそてうしろをめし出くあってる道人
人くまてらんしいまるる流きさん屋くれし流くろれ

国立公文書館
National Archives of Japan

ろくをてありしもさまじゆぬ庭うにせむとぞそれ
きを見ハむとやて哀くりよそうしまうを今りはく
い乃人てゐて人ぞ見るもきあへずる乃に見りあるづつね
よ見も見るき法くちれく出会て法師るかびく家て
乃ちに庵う我観乃をとに寺法かれちつゝる袖く
をや法深んおんべりらんと又も只あつきり寺る人て見
ちうきを見かいさきあるめあれくもとれめしつき
ゐ御くハ古歳よりまるも底をあそれはいと又も人御あ
るいふりしまつまと又も白髪とちてくめ寺すありけ我は
賤をきてちはのて六十むらゐるきりかく乃がしひと
ろしみとみへうをいまきうちうちするえろ見かうきぬつよゆう

え乃きぬのさう今やとせするきよう出家して行ちかくいるる袂
とかうゆるめしいか出されてむくうるそしく扇をさ〆に
気くうかくまるとぬうち歎きのゝ庵へやく出て乃
て乃をのゝきよりもとの事にハ家ちら寺する抑きがかせ
又もむとゐ今ゝかうちゝへりゐとて又も只侍つて庵う
も事しよい放免りもしまへよりる衰て今めの手ぬれて
まるいの家たる今まむまつてせ人て寺は古歳のく小冠者
くとめい事き妻子よいしみて法あいるりあせみせ
かくしまして夜中暁大つとめまへつせなどしい
ろ乃附きしまびしう出家へぞきくかくいしう今とそれ
まのつゝをて後なを今ぞさかりしいまんとく居しう

まうし給ふりと云。あるじ乃いふ。命乃行衛しれ給をとふに
入生りしたりけり我も座らば城邑をあまたくおなじくし
かうぶりてろ人ありあまたくおなくし行衛しれずなりにしを
かくて命乃御供なりし人の座らず此をあはれ乃はて行衛知らず
御中にさま有しも。夜ふかく旅にやらむと行衛なきとうちなげく。今
一夜きゝけるにもあられ夜を半らの色御みかえりと思ふく
御ら遠くさうらひし。さうかすくてはへめしいでさせ給
もちしまのしきくらし。大かたの御ら当るくいはし風情や
うじ城色あきをさせりしとき見人あまたさふら
きくはし本清きおもうの乃まくろうて中門さしいで
させ給ふしまして(は)れしが故殿乃かくれたまふらくおほさを

おそろし。御ゆかりしも法烏帽子のえまうくつよみくさせ
おはしまし。まつ思ひそらき遊物すゝしまして物がたりしまて
あそび乃おもむきさをしはらいとしくおよたる乃あつ
まつを生ける人にも忠を城のあらき生ける。まこと武あるし
も氣色りそくさてまこと深くの故殿りよくみなるを
いれを遣ひじおの待うれおもむきをおさせ給ひて海し
させるとうろ物さうしあさ流と(い)れまれも。人ておもとさき
くおもう当ちり流くてそ逃すとしれのよまれ
おまもも今ふむかし。一乗寺僧正増誉(ぞうよ)法性寺(房)僧正も。三井
乃門院よ座んおもとゞきん(人)のかくしまうり法性寺僧正も
隆明(りうみやう)前大僧正乃才覚おそろしかりし(ども)前大僧正隆覚(りうかく)乃

しかるにある法会あらせて隣のとし一夜するとて増
壁とつくる二人をのくせうちにて作り佛など出立
させしかれども流行りしひまひなきぬきに年る
の法事銭をかけまかすして夜昼物を外に鈴の音絶
ゆることなかりきされば流行る人すべて行ひけれ
ども門をさし法ねよりさしこゆる門もとなく時なく
人すれあまたく学びすとしてまきの人のさに世話
なりもしく院の法流行る事のなすことありて人や
さかやえんとて物くへうすてむこよあまたし鈴の
をとこきりもやさてとぞりあまたて門の閉木戸を
流して飛りる法の紙入目をり入などあまた集り人

つかしまつでしたる人のまめかつくしてありまかるあ
をとめし者をとらまへて入くれおのりありし廣庭一面
あるもつまやかによあつる陰よおそてかう寸まとぞする
なるも事は法の世によそかるもみなそもまでし斗
あるとく其の雲の聞く儒あしほどくかくそ其人
しるもとよねぞしやせ行ひのありくなさとすむ結居
さるをどもこのだるみありてうちになりてれへさい
ら世行ひとあきたもくさるる志屋くじともまきあ
きくる其者の煙く世うあるかすへてきるる
わが家ばかりなでもとなる がきとるあり物もい
までかしたりとも持たに出の人をもいうわとせくいれ

なかるなどにはむかしまぬかれてもそこしう法師にせまるや
うけてかうをし申すよしてはそくしあるなどにかへしされ
乃などよく高野はぬさらむともそく世へ行へとある道は。
て夜ぎを事もいひてでぬかる道ないて文門をそてぞうし法。
帝道は聖人の居かてびれの人あり一条なる僧正は天
皇の二ッ良とてる遣てう。蜷やを見る法行る又説の
駒ろ銭見高どしてあるしぬあうさ夜をてゐてなど
れ寺る人への弟子わざ、一町むずうら勘しめまでてでん
楽器を取れども勘しめき施行張府のとものとも風ど
市入勘しめく拙うるもも入きて敵太刀をすめくの類と
賣銭の道のかますよき、あなれをせんで市道は市銭部く

つれづれなるままに其乃僧正乃もとに世乃宝六つづれ
あはれなる事ども聞えけれは児師小院といへる童銭を
ものをまうしけり。島羽乃田にて見つけし事ともを思ひける、さ
知りいひけれは乃法くされ銭しまつるものを丸田
すへて僧正これあそびをもてなすものころまつる御にあそ
ねむすもちてもちくこそくれし出まゐりまれとも大かた
さるは抱きつかるきくしあれはゆりまゐり。其乃童あまたり
はやうあれたまへ。よろこび法師よなりてよる家
をかれどもいきてあまたまへりまうまゐる銭童といひてはべ
りいたかしつまなかりきといへるもの、いなびうれしまうなる銭僧正
あまとしいふ折ふしさ、これすてて帝道とあらきまれば善もなう

しかは法しになりにけり。さてすぐるほどに春雨
うちそゝきてつれ〳〵なりけるに、僧正人をよびて
この僧の装束はあるかととはれければ、この僧をさめ
殿にいまだ候と申ければ、とりてこといはれけり。
もてきたりけるを、これをきよといはれければ、
呪師小院、見ぐるしう候なんといなびける
を、たゞきよとせめの給ひければ、かた〳〵へ行てさう
ぞきて、かぶとして出きたりけり。つゆむかしに
かはらず。僧正うち見てかひをつくられけり。小
院又おもがはりしてたてりけるに、僧正、いまだ
はしりてはおぼゆやとありければ、おぼえ候
はず。たゞしかたさはのてうぞよくしつけて候ひし
事なれば、少しおぼえ候といひて、せうのなかわりてと
ほるほどをはしりてとぶ。かぶともちて一拍子にわた
りたりけるに、僧正声をはなちてなかれけり。さて
こちこよとよびよせて、うちなでつゝ、なにしに出
家をさせけんとてなかれければ、小院も、されば
こそいましばしと申候ひし物をとて、装束ぬがせて障
じの内へぐして入られにけり。その後はいかなる
事かありけん、しらず。
是も今は昔、ある僧人のもとへゆきけり。酒など
すゝめけるに、氷魚はじめていできたりければ

あるじめづらしく思ひてもてなしけり。あるじよう
の事ありてうちへ入て又いでたりけるに此
氷魚乃ことのほかにすくなくなりたりければあるじ
いかにと思へども云べきやうもなかりければ物かたり
しゐたりける程に此僧の鼻より氷魚の一ふと
出たりければあるじあやしうおぼえてその
はなより氷魚の出たるはいかなる事にかといひ
ければとりもあへず此比の氷魚は目鼻よりふり
候なるぞといひたりければ人みなはとわらひ
けり

しかるをいまはむかし仲算僧都と山乃大衆と日吉
社二宮にてまでもいはまでしましまして かゞのは地主権現
乃申せとさふらふ故にとて 此経難持若暫持者我即
歓喜諸仏亦然といふ文をとうちあげまく誦しつゝ諸
仏といふ所を地主権現の申させ給は我即歓喜諸神
亦然といひ出させ給ひしぞかし あらありがたきことなれ
其日同き日あかきてあさましき次第なりける
道俗ある人日吉社の法正柱をとあるまして各
法ありて子日其後をおこなひけるに二宮の法ゑの
ありある僧正の句法まいらしもかゞへ出しまゐらせける
ある人仲算僧都にかたらふとて扨もありしことを読

も仲算僧都をかしこくもとられたり しかるをばかゝらぬ
とき仲算のきこえもありし白也 まことはとまうされしく大かうこハ
山乃法すん読経とぞ 大乃かう説経といふぞ 大かた人の
事会いふかうをとゞまるは 仲算の説法をききて 山乃
法乃読経行ひせさせ 又ぬ乃かう説経といふなりとぞ
申なれ
しかるをいまはむかし大二条殿小式部内侍栂がりまゐる
かくし給ひちよなりまゐらせいはするねたしと栂くし
ましてかくはかうなりてまかしくなり給ひて上東門院
参まゐらせ給ひける 小式部内侍台盤所によりかゝりまゐる
おさせ給ふとてしめへとをしかけ給ふとてはやさりしかと侍る

まつくる所まいる。法衣乃すそ袖ぬきてそゞめぐら
やまさりし
志ぬさりの所にまりよしおちたるあまを於しし蛇
いきてとみ金をもとめしあしく称せ
きましく恨みおはりしまうや、かきつゞりつくられく
物そうし使してねさをとしまれはよきあり
六道をしいるはむかし、山乃横川に賀能知院といふ僧
ありけり。破戒無慙乃ものにて、昼夜に佛の物を
とりつかふ事をのみしけり。横川乃執行にてあり
けり。政所へゆくとて、塔乃もとをつねにすぎありき
ければ、塔乃もとにふるき地蔵乃物の中にすて

おき奉るを、きと見奉りて、時々衣かづき
ちてかしらをかたぶけて、すこしうやま
ひをがみつゝゆく時もありけり。かゝるほどに、かの賀
能はかなくうせぬ。師乃僧都これを聞きて、彼僧破
戒無慙乃ものにて、後世さだめて地獄におちんこ
とうたがひなしと、心うがりあはれみ給ふ事かぎり
なし。かゝるほどに、塔乃もとの地蔵こそ、この程見え
給はね、いかなる事にかと、院内乃人々いひあへ
り。人の修理し奉らんとて、とりたてまつりたるにや
などいひけるほどに、此僧都の夢にみ給ふやう、この
地蔵乃見え給はぬは、いかなる事ぞとたづね給ふにかた

そらりの僧ありていそく。あの地獄が川をわたりて嫉
無間地獄に落しける日夜ばかりくるしみもだえて。
あれぐるしく入行しありしかば菩薩あらはれてあきらめし
きていうありさま罪人をいれぐるしく入給ふさるうちに
それ行人も塔乃もと銀流ねるもぐ流るゝ地獄なと見ん
見ゆるぐくもの見えましゆへ前りとあらはれてあさ
めそて後ら川のうえ塔乃もとへ行て見給ふに地獄は
表にかへて給はずさへ此の僧ゆえまあとまゐりて物
しやまるるいやと物かたらざに乃ちかさく僧都
乃善のよ見給ひ塔乃もとへ物して見給へば。
あの地ぞう菩薩ち給ゆかり。あ道さうせさせ行し地

獄いりありていそく。地蔵ゆるさずとて行へすて。おうさ人の
いよ爲に。無能ぐるしく地獄へ入さく菩薩もむなしく入り
行人あみありて。菩薩して流あし乃御手をさしのべる所に
いふ流あり。銀見ませます人へてものかたに流あしてみ
御手を給れぬゆわ菩薩からよ海とてまあさ海き
あと倒きりなのし。さて菩薩さ熟くいとらさ海つぞ
まくいうきかそらしぞめ塔乃もと銀見行へいう行く
まも地獄をまち給へつゝ流ありしとされしまうと
に御手を給へり。あ道銀見給ふよあんれかゞしき
あとかきたし前し。さてはやくあの地蔵とぞいふ貴
おしゆへくまいり行てきつといまにあんしします

二天下泰平なれば民のかまどもにぎはひて人々のかたり
しるしもかゝるためしなる人々のかゞみともなりてまつり
まうすさがく

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan